

サウンドデザイン演習（女子美術大学）

【講義2】古代ギリシャの音楽
～「幻の規範」または学問としての音楽～

(May 31 / June 1, 2018)

講義担当：石井 拓洋
takuyo.ishii (a) gmail.com

2018

本日のポイント

- musicの語源「ムーシケー」の、本来意味するところは？
- ピタゴラスやプラトンにとっての「音楽」とは？
- 古代ギリシャにおける音楽とは（その位置づけ）
- 当時の代表的な楽器とは？
- 楽譜が現存する人類最古の音楽とは？
- 紀元後4C以降の1000年間、なぜ西欧はギリシャを忘れたか？

1. 音楽の起源

人類初の音楽家(!?)

1. 音楽の起源

人類初の音楽家(!?)

- 「その弟はユバルといい、
 豎琴や笛を奏でる者すべての先祖となった」

～ 旧約聖書 創世記 第4章 21節 より

- 紀元前 3000年頃の人らしい!?
- アダムとエバの子孫らしい (8代あと)!
- 「ノアの箱舟」 (前2800年頃) よりも前の人らしい!?

1. 音楽の起源

人類初の音楽家(!?)

(聖書の記述では)

アダム(享年930歳※) → カイン → エノク

→ イラド → メフヤエル → メトシャエル → レメク

→ **ユバル** (「竖琴や笛を奏でる者すべての先祖」、推定で紀元前3000年頃の人)

※ 旧約聖書 創世記 第5章5節より

※ 神話上の記述だが、かなり古くから音楽は存在していたらしい

1. 音楽の起源

メロディの誕生

- 言語起源説：言語の自然な発語にともなう抑揚
- 感情起源説：感情的な叫び声（下降線）

→ 「旋律」へと発展した、との説が有力

- クルト・ザックス *Curt Sachs* 米・民族音楽学者による説

[片桐ら 1996: 8]

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

“Music” の語源

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

“Music” の語源

- 「ムーシケー」mousike (ギリシャ語)
- 本来は「詩」・「音楽」・「舞踊」が統合した形を指す語。



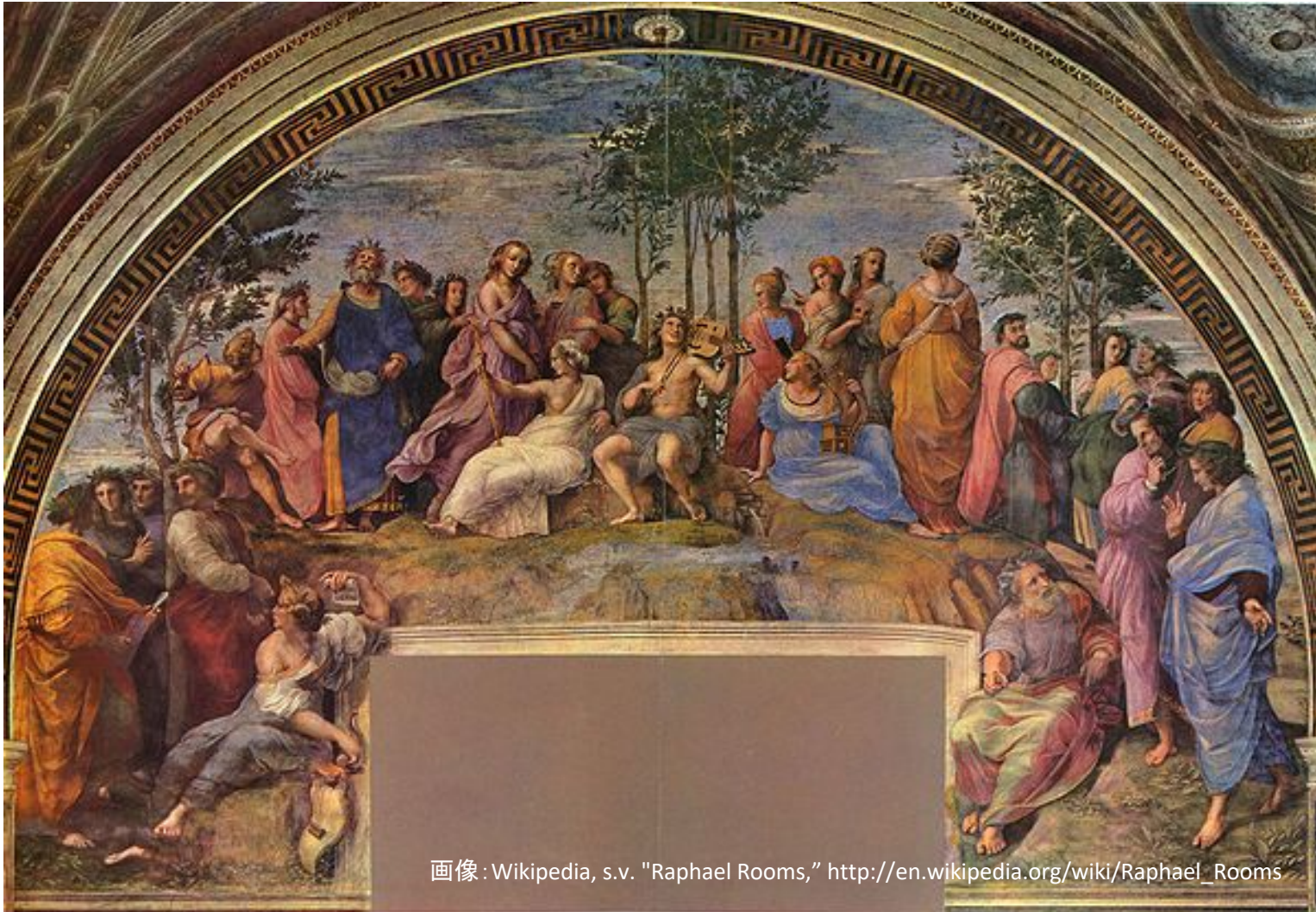
(そのさらなる語源は?)

- ムーサ mousa : ギリシャ神話の9人の女神 (英:muse)
太陽神アポロンと共に「芸術や学問」を司る

[片桐ら 1996: 15]

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)



画像: Wikipedia, s.v. "Raphael Rooms," http://en.wikipedia.org/wiki/Raphael_Rooms

ラファエロ・サンティ 「パルナツソ山」 (1501) ヴァチカン宮殿 (=サン・ピエトロ大聖堂に隣接するローマ教皇の住居)

Raffaello Sanzio "The Parnassus" (1501) The Apostolic Palace @Vatican City



画像: Wikipedia, s.v. "Raphael Rooms," http://en.wikipedia.org/wiki/Raphael_Rooms

アポローン apollo : ギリシャ神話の神でオリュンポス十二神の一人。詩、音楽、演劇などの芸術を司る神。また、羊飼いの守護神にして太陽神でもある。父は宇宙を司る神でギリシャ神話の主神「ゼウス」。

ムーサ mousa : 芸術家に灵感(インスピレーション)を与える9人の女神たち。それぞれに以下の芸術分野を司っているという。

カリオペ(叙事詩)、クレイオ(歴史)、メルポネペ(悲劇)、タレイア(喜劇)、エウテルペ(抒情詩)、エラト(独唱歌・恋愛詩)、テルプシコラ(合唱・舞踏)、ウラニア(天文、占星)、ポリュヒュムニア(神をたたえる讃歌・物語)。

※ この絵では作者ラファエロ・サンティ自身も描かれている(カメオ出演!?)。



画像: Wikipedia, s.v. "Raphael Rooms," http://en.wikipedia.org/wiki/Raphael_Rooms

バチカン宮殿内のバチカン美術館「署名の間」の北壁と西壁に所蔵されるラファエロのフレスコ画「パルナツソス山」(1501, 左, 北壁)と「アテナイの学堂」(1509, 右, 西壁)

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

ムーシケーとしての「ギリシヤ悲劇」

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

ムーシケーとしての「ギリシヤ悲劇」

- 「詩・音楽・舞踊」の理想的な融合 → 「総合芸術」
- 前5C. ギリシヤの都市アテネで上演
- 仮面をつけた俳優 と 合唱隊(コロス・Choros)
- 舞台を「オルケストラ」という
- 代表作 『オイディプス王』 (ソポクレス作)など
- 西洋音楽史上の重要な転機で常に理想型として参照される
- 特に、バロック・オペラや 楽劇 (R.ヴァーグナー) の理想型

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)



「エピダウロス」のテアトロン

画像: http://www.greecebytaxi.com/minibus_full.html

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)



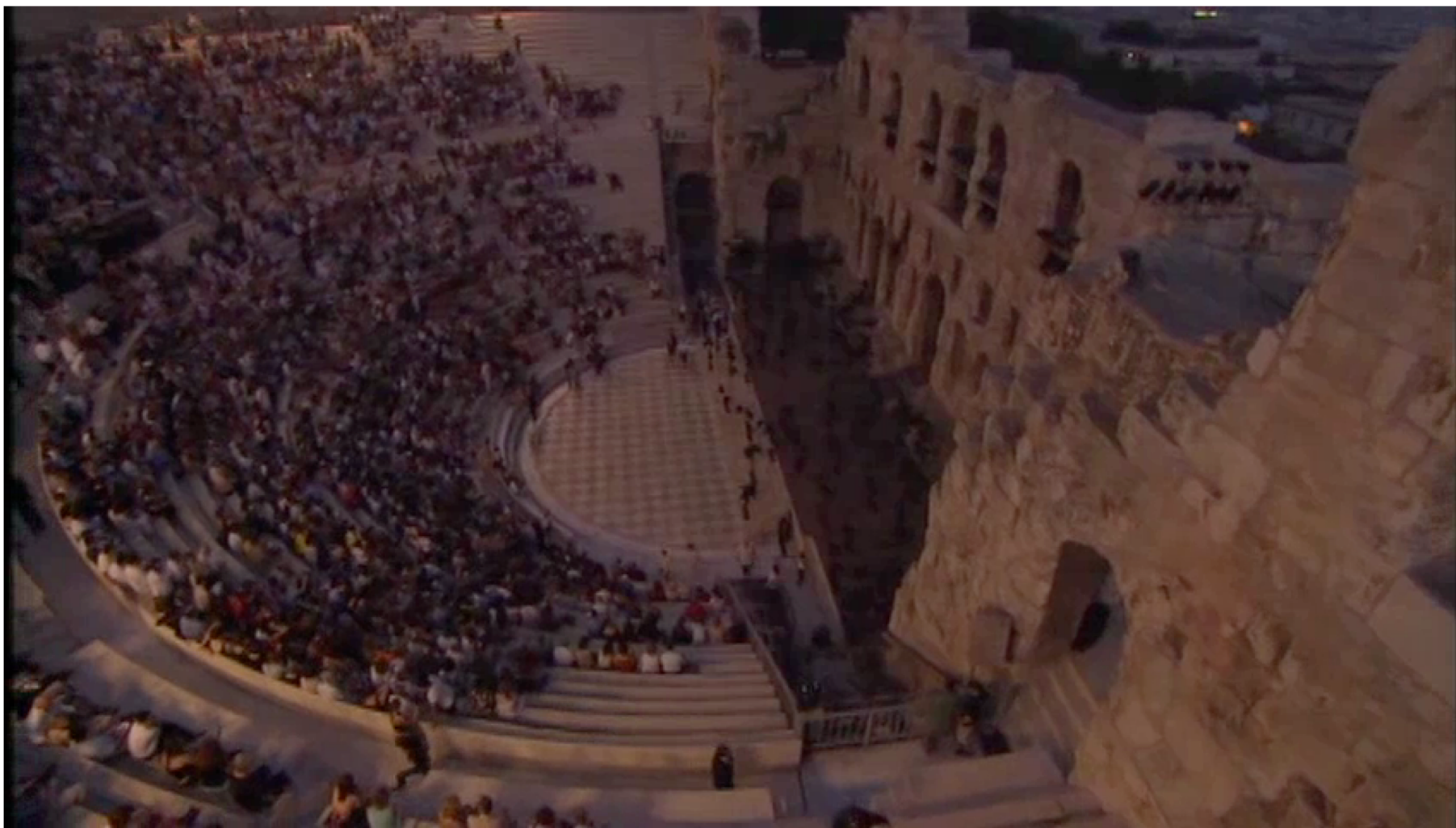
映像：DVD『世界遺産 8 ギリシャ／マルタ』WHD-308、キープ株式会社(輸入発売元)、2006年(発売)。

現在のギリシャ共和国 アテネのアクロポリスの様子 (映像 6分間)

映像：DVD『世界遺産 8 ギリシャ／マルタ』WHD-308、キープ株式会社(輸入発売元)、2006年(発売)。

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)



映像：DVD「オイディプス王」ソポクレス原作(前427頃)、蜷川幸雄演出、ギリシャ公演 (2004発売)、発売元：角川エンターテイメント

※ 日本の趣を活かしてに演出されたものと考えられる。上演場所はアテネのアクロポリスにある「ヘロデス・アティコス音楽堂」。約3分間。

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

ピタゴラス 「天体のハルモニア」としての音楽

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

ピタゴラス 「天体のハルモニア」としての音楽

- 音楽 = 「**宇宙の秩序を示し、調和を象徴するもの**」
- ピタゴラス(前582-前496) - 「万物の根源は数」
- 数が協和音を作り出すことを唱える。
(オクターブ「2:1」、完全5度「3:2」、完全4度「4:3」)
- 音楽の協和音を、宇宙の形成原理までに適応
→ ピタゴラスによる「**天体のハルモニア**」

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

プラトン 「エートス」(理性)としての音楽

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

プラトン 「エートス」(理性)としての音楽

- ・ プラトン(前427-前347) - 音楽におけるピタゴラスの思想を継承
- ・ 音楽を「**魂の調和**」を促すもの → 「**教育**」に取り入れる
- ・ 「音楽」(魂・精神の訓練)と「体育」(身体 of 訓練)
- ・ アリストテレス「(音楽は) 徳を形成するための教育手段」
- ・ 音楽は**数(数字)が原因となるもの**であり、数が適切である時、**自然(宇宙)や人間にとって調和をもたらすもの**と認識された

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

つまり、古代ギリシャにおける〈音楽〉とは、

〈表現〉というよりも、むしろ〈学問〉に近かった。

それは、相当に〈数学・物理〉寄りの分野であった。

※このような経緯があり、約1000年後に現れるヨーロッパの大学で〈音楽〉は主要な科目として採用されることになる。

c.f. 本講義資料「講義3：中世の音楽」

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

「古代ギリシア音楽のあり様は、音楽芸術のあるべき『古典』として、**その後のヨーロッパ音楽の方向づけのための幻の規範の役割を果たしつづけてきた**」

[皆川 1977: 21]

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

代表的な2つの楽器

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

Aulos 「アウロス」 笛 (二本管)



画像: <http://www.mlahanas.de/Greeks/Music.htm>

「アウロス (aulos) は 木材、動物の骨、金属などからつくられた、オーボエに似た管楽器で、デュオニューソス (※) の楽器ともいわれる。
ふつう二本のアウロスをつないだものが用いられた」

(アリストテレーレス『詩学』松本仁助ら訳、岩波文庫、第1章訳注より、113頁)

※ デュオニューソス : ギリシャ神話の神の一人。葡萄酒と演劇の神。

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

kithara「キタラ」豎琴



画像:

<http://ancientolympics.arts.kuleuven.be/eng/tc015en.html>

※ Guitar「ギター」の語源

「キタラー (kithara) はギリシヤの代表的な豎琴で、アポローン (※) の楽器ともいわれる。弦の数は五、七、十一、十二と次第に増加した」

「演劇ではアウロスとキタラーの両方が用いられたが、アウロスの音楽が人々を興奮させる働きがあるのにたいし、キタラーの音楽は感情をはずめる働きがあり、より高貴なものともみなされた」

(アリストテレス『詩学』松本仁助ら訳、岩波文庫、第1章訳注より、113-114頁)

※ アポローン: ギリシヤ神話の神でオリュンポス十二神の一人。

詩、音楽、演劇などの芸術を司る神。また、羊飼いの守護神にして太陽神でもある。父は宇宙を司る神でギリシヤ神話の主神「ゼウス」。

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

今日、古代ギリシャで
実際に奏されていた
当時の音楽を
聞くことは出来ないのか？

2. 古代ギリシャの音楽

(前700年頃～前30年頃)

「セイキロスの墓碑銘」

- 世界最古の楽譜 「セイキロスの墓碑銘(ぼひめい)」
- 墓石に「歌詞」と「旋律」が刻まれているものが発掘
- 1882年頃、トルコで鉄道工事中に発見されたという
- 紀元前100年頃に確かに存在した音楽 (人類最古の音楽)

情報ソース

<http://www.hurriyetdailynews.com/aydin-seeks-return-of-old-composition.aspx?pageID=238&nID=12408&NewsCatID=375>

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)



古代ギリシヤの音楽が記された墓石
「セイキロスの墓碑銘」(B.C.100年頃)

1882年頃、トルコで発掘

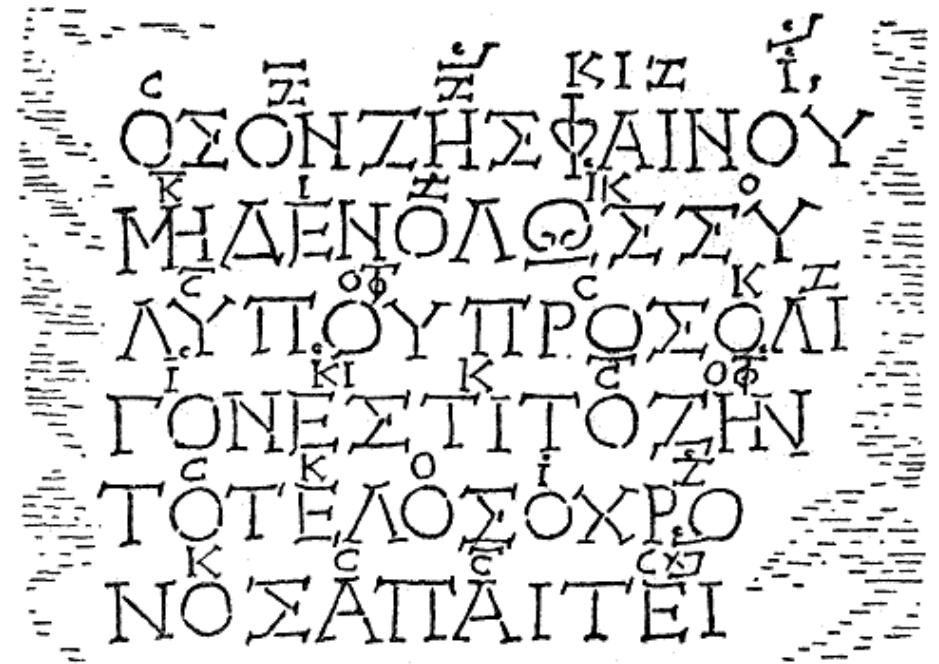


Abb. 15/16. Kopenhagen Inv. Nr. 14897 (= Nr. 18)

2. 古代ギリシヤの音楽

(前700年頃～前30年頃)

「生きている間は輝いていてください
思い悩んだり決してしないでください
人生はほんの束の間ですから
そして時間は奪っていくものですから」



試聴：《セイキロスの墓碑銘》（紀元前100年頃に実在した音楽）

CD: 「Musique de la Grece Antique」より「11. Epitaphe De Seikilos」

「人生は短く 術のみちは長い」

ヒポクラテス (前460頃 - 前370頃, ギリシャの医者)

Ο ΜΕΝ ΒΙΟΣ ΒΡΑΧΥΣ
Η ΔΕ ΤΕΧΝΗ ΜΑΚΡΑ.

オーメン ビオス ブラクシ
エー デ テクネ マクラ

@ 女子美正門

この語と女子美との関係のいきさつは以下の資料を参照。

Ο ΜΕΝ ΒΙΟΣ ΒΡΑΧΥΣ
Η ΔΕ ΤΕΧΝΗ ΜΑΚΡΑ.

女子美術大学歴史資料室ニューズレター

『テクネ・マクラ』 第2号 (2010年10月25日発行) 2頁。

<http://www.joshiabi.net/history/pdf/images/texnh02.pdf>

3. その後の古代ギリシャ

(400年頃～)

ヨーロッパから一度「忘れさられた」ギリシャ文化

3. その後の古代ギリシヤ

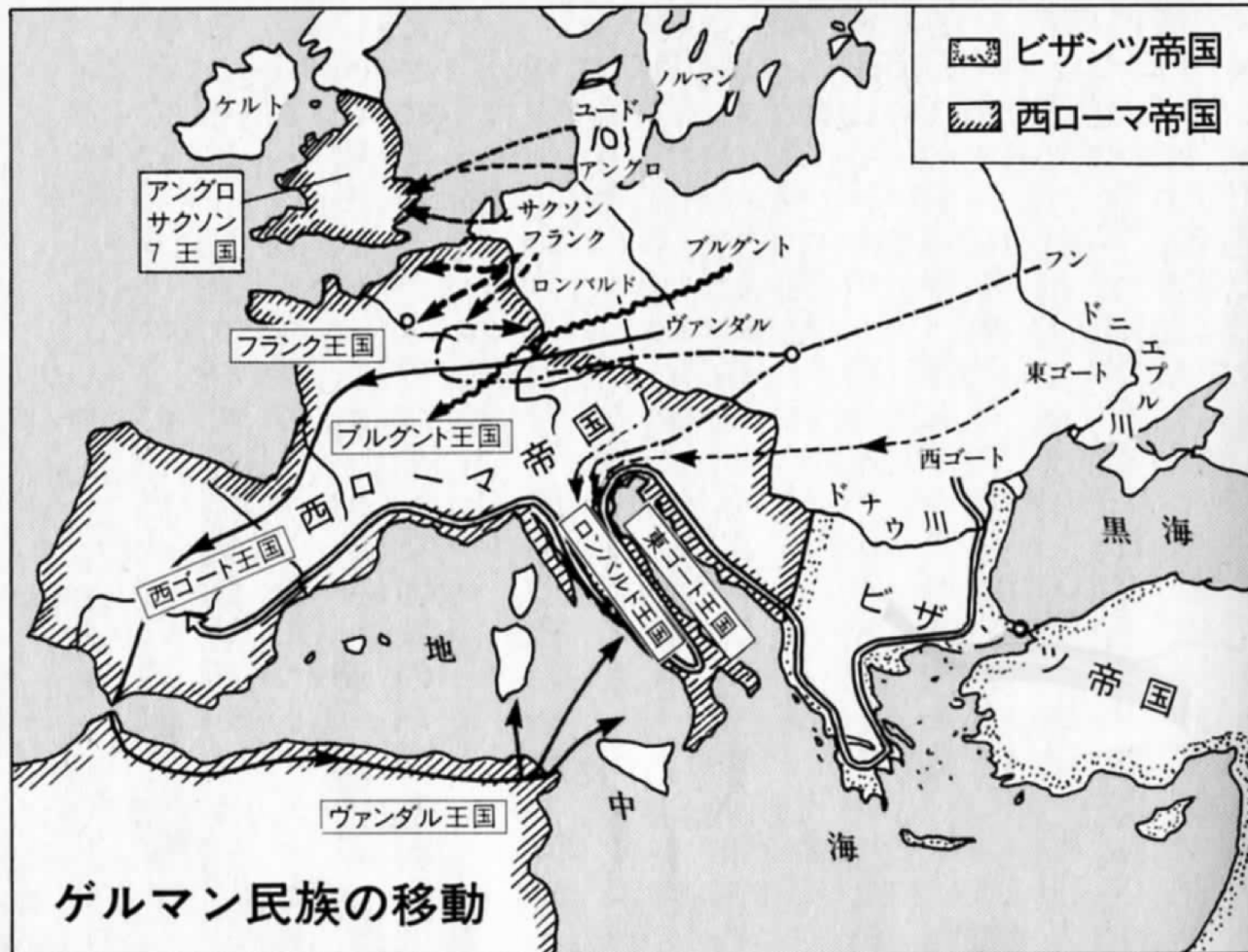
(400年頃～)

ヨーロッパから一度「忘れさられた」ギリシヤ文化

- ・ 4世紀頃、「ゲルマン民族の大移動」が起きる (ゴート族など)。
5世紀に西ローマ帝国が滅亡し、西欧に進出したゲルマン人は新たな国、フランク王国 (現代の仏・独) を興す。それが現在の西欧の礎となったが、ここで、ギリシヤ継承の断絶が起きた。
- ・ この断絶によって、西欧 (ゲルマン人の西欧) は、ギリシヤ・ローマの古典文明の書物を手放してしまい忘れてしまった (プラトンやアリストテレスのこと、など)。
- ・ 更に、7世紀(622)から イスラム帝国が、南ヨーロッパに勢力を広めた。東ローマ帝国 (ビザンツ帝国) を経由して、古代ギリシヤの書物がイスラム教徒の手中に留まった。そのため、西欧 (ゲルマン人の西欧) に伝わらなかった。

3. その後の古代ギリシヤ

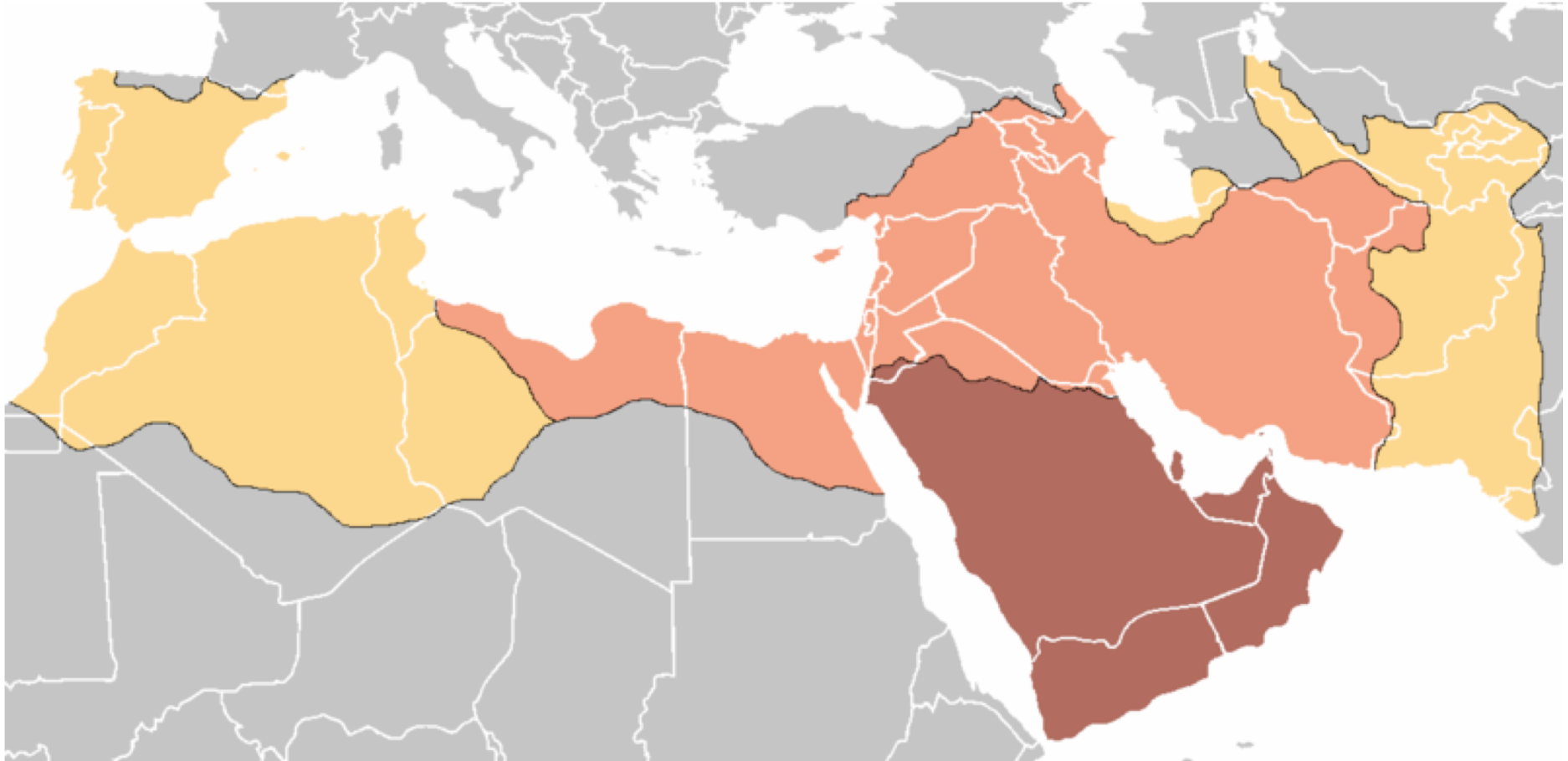
(400年頃～)



図： 水村光男 『この一冊で世界の歴史がわかる』 三笠書房、1996年、67頁。

3. その後の古代ギリシヤ

(400年頃～)



8世紀頃の「イスラム帝国」の勢力図（イベリア半島がイスラム化している）。
622年の「ヒジュラ」（ムハンマドがメッカでの布教を諦めて、メディアへ移住）を契機として、
彼らはイスラム暦を紀元元年とあらためた。その後、8世紀には巨大な帝国が形成した(村上：43)。

3. その後の古代ギリシヤ

(400年頃～)

ヨーロッパから一度「忘れさられた」ギリシヤ文化

つまり、4世紀頃からの約1,000年間、
ゲルマン人たちの西欧は、ギリシヤ文化の存在を
知らなかった。

「12世紀までのヨーロッパ人たちは、
ギリシヤ・ローマについては、
ほとんど何も知らなかった」

[村上 2004:38]

※ ここでは、14世紀に先んじる12世紀の西欧におけるアラビア文化との接触が、
その後の「ルネサンス」を可能にしたと強調する学説、
「十二世紀ルネサンス」に基づく歴史観を採用した。

3. その後の古代ギリシヤ

(400年頃～)

ならば、その後、どのような経緯で、
ふたたび
古代ギリシヤの知恵が
西欧の芸術等に
甦るに至ったのか？

(= ルネサンスはどのように起きたか？)

3. その後の古代ギリシャ

(400年頃～)

次回、講義 3「中世～ルネサンスの音楽」の中で解説

さらなる知識のために

- 岡田暁生 (2005)『西洋音楽史』中公新書
- 片桐功 他 (1996)『はじめての音楽史』音楽之友社
- 皆川達夫 (1977)『中世・ルネサンスの音楽』講談社現代新書
- 村上陽一郎 (2004)『やりなおし教養講座』NTT出版
- ドナルド・H・ヴァン・エス (1970=1986)『西洋音楽史』新時代社
- 小田部胤久 (2009)『西洋美学史』東京大学出版会
- 今井康雄 (編) (2009)『教育思想史』有斐閣アルマ
- アリストテレス『詩学』・ホラーティウス『詩論』岩波文庫-青604-9
- 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫